

十二月の初旬

午後の二時を少し廻った頃であろうか。十月に定年を迎えたばかりの千葉亮一は、山間に囲まれた自然公園の遊歩道を一人歩いていた。谷を流れる川の瀬音が間断なく耳に鳴り響き、視界はどんよりとした薄闇に閉ざされて幽寂とした雰囲気が漂っていた。

曇り空は一面薄墨を流したような雪雲が覆い被さるように垂れ込み、陰鬱な空気が山の樹立の空間を埋め尽くしている。鬱蒼とした空模様が影響しているのであるうか、この日はいつもより擦れ違う人影が極めて少ない。

極めて少ない、という表現は些か正確さにおいて欠けるのだが、実際はここまで歩いて来る間、誰一人として逢わなかったのだから。こんな日もあるのかと、そう思っていた時である。向うの方から誰かが歩いて来る。野球帽をかぶっているのです、この距離だと男女の区別がつけ難い。

しかし、直感的に女の人だろうと思った。躯全体の骨格が華奢で、歩き方が何となく女性らしい柔和な淑やかさが感じられたから。そして歩きながら、おやっ！と思った。顔見知りのような気がしたからである。頭の中で素早く記憶をたぐり寄せ、誰だっただろうか？と憶い出していた。

そう思う間もなく二人の距離はみるみる中に縮まり、相手の顔の輪郭が判然としてきた。あっ！ あれは長田律子だ。珍しい……。彼女は何時もこんな山道を一人で歩いているのだろうか？

訝しく思う間もなく二人は やあ…… という感じで、笑顔を見合わせながら路傍に向き合って立ち止まっていた。顔を見合わせると懐かしさが込上げてきて自然と柔和な微笑が零れる。

「やあ、今日は、おひさしぶりですね」

「まあ……。何時も歩いていらっしやるの？」

「ええ、まあ…… 大概の日は」

長田律子は、もう十五年前に会社を辞めている元亮一の部下だった。電子部品会社の営業部に在職していた頃に暫く付き合っていた。関係が深入りする寸前で、彼女は身を引

くように会社を辞めて行った。

それからどうしたのかは全くの音信不通で知らなかった。多分退職理由が結婚だったの
で、結婚でもして新しい家庭を築き、出産後は子供などの養育に忙しく過しているのだろ
うと、その安穩な暮らしぶりを勝手な想像をめぐらしているうちに、何時しか記憶から遠
退いていたのである。たった今のこの瞬間まで思い出しもしなかった。

それが今日偶然にも出逢ったのである。律子の姿からは、平凡な主婦のイメージを想像
することは難しい。濃いブラウンの野球帽に白に黒のストライプの入ったトレーナース
ーツを着込みジョギングシューズという、どう見てもスポーツ・ウーマンを表象するよう
なアブノーマルな服装で、このような彼女の姿は脳裡に思い描いたこともない。

「本当にひさしぶりだわ」

「あれから、もう、かれこれ十五年ぐらいにもなりますか？」

「そうね。早いものですわ、そんな歳月が経っているなんて」

「先々月、遂に卒業を迎えましたよ。会社の方」

「あら、そうでしたの、それはおめでとございます」

「いあ……。ところでお身体の方は、お元気なんですわ」

「ええ。何とか……。千葉さんの方は、お変わりありませんか」

「ええ。おかげさまで……。この通りです」

「そうですか。それは結構ですわ」

律子は懐かしそうに微笑を浮かべてそう言った。それから二人は路上で立ったまま向き
合い、時間も忘れたかのように、簡単に近況を報告しながら、脳裡に過去を蘇らせて語り
合った。そうして三十分近くは、取りとめもない話に夢中になっていたのではないだろう
か。

亮一は話をしている間、長年一つ企業の中で過した人間が、その組織を離脱すると、こ
うも人恋しく、懐かしい思いで胸がときめくような躍動感を覚えるものだろうか、ふっ
とそんな不思議な感覚を味わっていた。

律子は終始変わらぬ鬨りのある笑顔で快活を装っていた。ただ運動をしている人間の表
情にしては、病人のような日焼けのしない蒼白い顔をしていたことが妙に気にかかってい
た。凜とした覇気が感じられない。一応の話題に尽きた頃、互いに

「それじゃがんばって下さい」

「あなたも……。お身体に気をつけて」

「ええ。またお逢いするかも知れませんが……」
「そうですね」

と、言い合って互いに行き交った。一端は別れたけれど往路の途中だったので、また復路で出逢うのではないかと思ったりしていたが、律子はその後どのような経路を辿って帰って行ったのか、復路で再び逢うことはなかった。

亮一は別れた後暫く、昔の彼女との日常生活を憶い出しながら歩いていた。律子は営業部の企画課で製品の売価の管理やカタログの作成などの業務に携わっていた。どちらかと言えば目立たない地味な存在であった。

独身なのに特別に噂に上るような浮いた話もなく、アパートと会社の間を規則正しく往還を繰り返しているだけといった、面白味も愉しみもないような平凡な人生に明け暮れている印象が濃くあった。

そんな彼女を慰めるつもりでもあったのか、気軽に一度食事に誘ったことがある。断るかと思っていたが、何の躊躇いもなく承諾して付いてきた。どう思っているのか、その本心は判らなかったが、誘うと喜悦に満ちた表情で付き合ってくれるので、それから何回か食事を共にしたことがある。

食後は街中をウインドウ・ショッピングに付き合ったり公園を散策したりした。また稀には飲みに行くこともあったが、別れる時が来ると、何か不満めいた表情を醸し出す場面も時にはあったが、結果的にはいつも潔く別れ、決して深入りすることはなかった。

誘えば、或いは最後まで着いて来たかも知れないが、頑ななまでに男女の一線を超えなかったのは、何も彼女に女性的な魅力が欠落していたからではなかった。また亮一が聖人君子を気取っていた訳でも、潔癖主義で通していたわけでもない。

強いて、その答えを探すとすれば、それは二人の間に横たわる十六歳という年齢差の壁ではなかったかと思う。清浄心を汚したくないという父性愛とも称すべき妙な道徳心と自制心が働いていた。

しかし、よくよく考えてみれば、それは卑屈感に囚われた傍若無人ともいうべき自己欺瞞であり、牽強付会けんきょうふかいにすぎるものであったのかも知れない。そのような後悔が無きにしても、あらず、の感があった。到底律子の心の壁まで諦観することが出来なかったのだから。

彼女が会社を辞める二週間程前にも食事のあと飲みに行ったことがあるが、この時は珍しく深酔いし、仕方なく彼女の家まで車で送って行ったことがあった。それが最後だった。

二週間後、彼女は結婚を理由に辞表を提出して会社を退職して行った。

亮一は不遜な思いで言うのではないが、あの頃の彼女にとってもそんな相手がいるとは思えなかった。だからきつと見合いでもしたのだろうと密かに思っていた。そんな昔を脳裡に憶い出しながら歩いていると、やがて出発点の道に戻って来た。

それから、そんなことがあったことも忘れてしまった十二月の中旬頃、退職者が組織する親睦会から会誌と共に一通の会員情報を掲載した紙面が届いた。そこには会員の近況報告や移動状況が掲載されている。一人一人の近況に目を通して見ると、長田律子の近況報告が目に入った。

体調がよくありません。やっと退院してきました

ただそれだけしか書かれていなかった。それからずっと紙面の下の方を見ると、幾人かの訃報者の名簿が載っており、退会者名簿に律子の名前が記載されていた。紙面の日付を見ると、会員の近況報告は十二月一日現在となっており、訃報日付は十二月五日と記載されていた。

この紙面から察するに彼女は長い間病院で入院生活を送っていたらしい。そして親睦会に各自の近況報告をする一日時点では、最近やっと退院して来たらしいことが伺える。しかしその僅か四日間後に自宅で亡くなっていたのである。律子享年四十四歳だった。

よほど重い病魔に侵されていたのであろう。退院の許可を出したのは、死期を予知した病院側の配慮だったのかも知れない。それにしても、不可解なのは、他のいずれの訃報者についても通夜や葬儀の弔辞の緊急連絡が来ていたのに、何故彼女の連絡だけが配信されなかったのか。それが亮一には疑問だった。

もしも、これが事実だとすると、あの山道で律子に出逢ったのは、あれは一体誰だったのだろうか。あの時の律子の翳^{かげ}りある優美な微笑を脳裡に憶い描きながら、世の中には不思議なことがあるものだと思いつつも、途端に背筋に冷たいものが走り、ぞくぞくと、寒くなるのを覚えていた。あれは律子ではなかったのか。

訃報日付から推測すると、亮一が律子と山道で出逢って歓談している頃、もう一方の律子は恐らく臨終の前後か、それとも死亡した後のことではなかったか。彼の頭は暫く混乱していた。もしかしたら、自分が山道で出逢ったのは別人ではなかったのか？

しかし、幾ら何年も逢わなかったからと言って人の顔を見忘れてしまうほど、まだ耄碌はしていないつもりである。逢ったという証拠は何もないが、間違いでないことには確信があった。あの時の何時までも消えない律子の微笑が脳裡にくっきりと焼き付いて離れない。

それから毎年十二月の末に行われる親睦会の恒例の忘年会があった。定年退職者が多かったが、女性には再就職しない途中退職で専業主婦になった四十、五十歳代の若手と呼ばれる人も結構いた。亮一が会場になっている料亭に顔を出すと訃報者の話題が出た。

「人間の一生なんてものは判らないなあ……まさか俺より若い長田さんが、先に逝ってしまっなんて……。不条理だね」

「まだ確か四十代だろう？」

「男だったら働き盛りだのになあ……」

「女だって同じさ。これからっていう時だよ」

皆は一応に神妙な表情で向き合っていた。

「ところで、なぜ彼女の弔辞の連絡だけが来なかったんだ」

「それぞれ、俺の家にも来なかった。誰の家にも連絡が来なかったらしいよ」

「どうしてなんだ」

「葬儀が終わってから、会の役員の方には、一応事後連絡があつたらしいがね」

「彼女独身で身寄りも少なかったらしくて。葬儀も質素に内々に済ませたらしいよ」

「へえ。独身だったのか？」

皆は一応に意外だという表情をしていた。確か退社するときには結婚するというのが理由ではなかったのか。それは女が会社を辞める時の口実で、実際は結婚をしなかったのかも知れない。或いは一度したが失敗して直ぐに別れたのかも知れない。

その辺りの事情を知る者は誰もいなかったのだが、それは、どちらにしても彼女にとっては恥辱的なことで、出来れば内密にしておきたかった事象には違いない。だから皆は推測するしかなかった。

「しかし、勿体ないことをしたね」

「誰か好きな人でもいなかったのかなあ……」

「そりやいただろうさ。彼女は悪くなかったよ」

「そうだね。美人とまでは行かなかったけれど、大人しくって、いい娘だったよ」

「少し根が暗い感じがしたがね」

亮一は、周囲の噂話を上の空で聞きながら、泥酔い近く酩酊した最後の夜のことを憶い出していた。一軒目の鮎屋でビールを数本飲み、それから場所をショットバーに移動してからはジンフィズを二、三杯ほど飲んだ。

その夜、律子は何かに執りつかれたように寡黙で飲むことに無心だった。彼女はアルコ

ール類にそれほどの免疫力が備わっていたわけではない。ジンのカクテルは口当たりもよく、直ぐに酔いが廻った。

今冷静に考えてみると、深く自尊心を傷つけられたように不快感を頭あたまにして、怒りに震えていたのかも知れない。そう推測すれば、あの夜の不可解な彼女の行動にも納得の行くような気がする。亮一はそのような考えに囚われていた。

車で送って行った時にアパートの扉の前で、崩れるように身を屈めたので、仕方なく軀を抱えるようにしてベッドにまで運んで行った。部屋の中は女性の一人住まいを表象するかのよう、几帳面に整理整頓が行き届いていたが、女性特有の化粧品の混ざった匂いが鼻腔をくすぐった。

彼女を寝かせながら、無造作に投げ出した白い脚に視線がぶつかった瞬間、微かな情欲をそそられるような感情を覚えたが、すぐにそれを払拭し、鍵の置き場所をメモに書き残してから立ち去ろうとした。そのとき微かな呻吟の音がして

「部長、好きです……好きなんです……」

と、寢言のような呟きを漏らしたのである。一瞬亮一は振り返って彼女の顔を一瞥して見たが、静かな寢息を立てている姿に、何ごともなかったように部屋を出て行き、鍵を掛け、それを郵便受けの窓に掘り込んで、待たせていた車に乗り込んだのだった。

車に乗ってから、しばらくは律子の不明瞭な呟きが耳覚から消えなかった。判然と聴いたわけではない。そういう風に聴こえたという程度であるが、律子が本当は酩酊しておらず、酔ったふりをしていただけなのかも知れないと思った。

泥酔いに酩酊して醜態を曝すことが、彼女の精一杯の自分への反抗、抗議だったのかも知れないと亮一は思い、何かやるせない自責の念に駆られるのだった。

それから新しい年が明けて、月日は何ごともなく流れて行った。そして、律子のことは記憶から再び過去のものとして消え去って行ったのである。三月の暦も終わり、日本列島は桜前線の移動情報に華やいだ季節の活気が漲っていた。

四月の声を聴くと、ちらほらと桜の便りが届きはじめる。待ち望んでいた暖かさが漸くこの身に実感として感じられるようになった。亮一は日課の歩行は、府立の太陽が丘運動公園で行っているが、木曜日には休園日なので、この曜日ばかりは近くの森林公園近くの遊歩道へと出かけて行くことにしている。

四月の中旬頃になると、森林公園の周辺には、桜の花が薄いピンクや白の花弁を華麗に

咲き綻んだ姿を見せる。亮一はこの日も何時ものコースを歩いていた。さすがに季節の影響もあるのだろう、多くの人々が花見気分でもオーキングを楽しんだり、ジョギングに興じたりしている姿が目立つ。

そのような華麗とも思える雰囲気の中、前方から春の木漏れ陽の光芒を浴びながら野球帽を被ったジョギングの女性ランナーが近付いてくる。何時かの長田律子の姿にそっくりだった。亮一は、その姿を目にした瞬間胸の鼓動が激しく脈打つのを感じていた。

背格好から顔の輪郭、そして、目鼻立ちの整った表情までもが瓜二つといっても過言ではない。まさか律子であるわけがない！ 彼女は昨年暮れに間違いなく死んだのだ！ 自分に言聞かせるように何度も呟いていた。

亮一は、これはきつと他人の空似だと、高鳴る鼓動を押し静め平静を装いながら擦れ違おうと覚悟をきめていたのだが、二人を隔てる距離が三メートルほどになった時、相手のランナーはピンクに上気した顔に微笑を浮かべて

「おはようございます」

と、まるで旧知の間柄でもあるかのように、軽い会釈をしながら、爽やかな挨拶の言葉を投げかけて来た。それはごく自然な好感を抱かずには置かないポーズであった。

「おはようございます」

亮一も、ほとんど反射的に挨拶を送り返していた。立ち止まるのかなと思ったが、ランナーはそのまま走り去って行ってしまった。それでも擦れ違ふ瞬間、亮一は自分でも信じられない素早さで相手の被っている帽子のロゴマークを確認していた。間違いなく黒い星のマークに横文字が入った、律子があどきに被っていたものとまったく同じ帽子であったことを見逃さなかった。

だが、立ち止まらなかつたところを見ると長田律子ではなかつたのかも知れない。しかし顔は律子と瓜二つであった。一瞬律子の訃報は間違いだったのではないかとさえ思えたものである。しかし、いや、あれは間違いなく長田律子だ！ と彼は思わず呟いていた。

あの親しみの籠った微笑の笑顔が何よりの証拠だ。彼女は言うまでもなく相手の顔を知っていたのである。でなければ、見知らぬ他人に対してあのような親しみのある微笑を送れる訳がない。彼女が立ち止まらなかつたのは、以前に充分情報を交換し合って、もう何も話すことがないと思ったに相違ない。

暫くは混乱した頭を抱えて、どこをどう歩いていたのかも定かではない。不思議な動揺を覚えながらも、論理的に詰めて行くと、あの女性ランナーが長田律子であるはずはなか

った。何と言っても彼女はもうこの世の人ではないのだから。存在事態をネガティブに考えざるを得ない。

そのような不思議な出来事があってから数日後のこと。川釣りに行くハヤの餌を求めに釣具店に行くと、その広い店内を小学生ぐらいの男の子が二人走り廻っていた。その子を視線で追っていると友人の横田にばったりと出会った。

亮一が近付くと、彼は懐かしそうな微笑を浮かべて言った。

「あおり烏賊いかを釣りに行くつかと思って……」

「海釣りか」

「まあ……。偶には孫を喜ばせようと思ってね」

「ああ、そりゃいい……。それはそうと、この間長田律子を見かけたよ」

言ってしまったから亮一は後悔した。何の気なしに言葉が先に出てしまったのだ、今更引込みがつかなかった。予想した通り横田は驚愕した表情で凝視しながら、

「ええ？ 嘘だろう」

「嘘や冗談でこんなことが言えるか」

「まさか……。人違いじゃないのか」

「いや。本当に見たんだよ。間違いないんじゃない」

「お前、自分が何言っているのか判っているのか？」

「もちろん、判っているよ」

横田は怪訝な顔つきをしたまま見詰めて言った。

「彼女は昨年の暮れに亡くなっているんだぜ。そんなの見るわけがないだろう」

「信じられないだろうけど、それが間違いなく逢ったんだ」

横田は信じられないという顔付きを通り越して、相手に対して猜疑心を抱きはじめていた。正気なのか！ と言った感じの表情を崩さなかった。

「お前一度医者に診て貰ったらどうだ。心療内科って知っているだろう。最近患者が多いらしいよ」

「昔の精神科ってところだな」

「うんまあ。幻影とか幻覚を見るといのは、脳か心に何か異常があるのかも知れない。診て貰ってどうもなけりやそれに越したことはないじゃないか」

「……」

横田は親身に心配しながらそう進言するのだった。彼は冗談のきつい男ではない。わり

と思慮深く真面目で誠実な男だった。理性的な面も持ち合わせている。横田のような人柄から推して、そう言われてみると、亮一は自分自身でも正常であるとの確信が持てなかった。

もしかすると、自分は本当に病気なのかも知れない。と、ふっと焦燥の混じった不安に駆られるのである。彼の進言を否定することなく、真摯に受け止めることにした。

それから数日後のこと、亮一は日赤病院の心療内科を訪れていた。待合室は座る席がないほどの盛況ぶりと言おうか、大勢の患者が待っていた。昔突然に激しい不安に襲われて体が震えるという症状に見舞われた時機があった。その時にも一度、同じ日赤病院の精神科に掛かったことがある。

精神科という病名の表札の前で待つというのは何か、患者にコンプレックスを懐かせるようで幾分抵抗感があった。しかし、心療内科と表示されると同じ心の病気であっても、ひと頃のような抵抗感は薄らいでいる。

で、どのような症状かと医師に訊ねられて、一瞬嘲笑をかうのではと躊躇した。

「亡くなった人の姿を見るとというようなことがありますか……」

「幻覚ですか……？」

「ええ。まあ……。自分では決して幻影や幻覚をみているという感じはないのですが」

亮一は曖昧に心えていた。

「夜はよく眠れますか」

「はい。七時間程度は……」

診察するといつても、触診するわけでもなく、医師はただ少しも表情を変えずに熱心にカルテに書き込みながら、幾つかの質問をした。口調は穏やかで弄するところはなく、あく迄も癒し系そのものだった。

「お薬を出して置きますから、暫く飲んで様子を見ましょう」

「このお薬は？」

「心配は要りません。軽い精神安定剤です」

「はあ……」

「二週間後にもう一度来て下さい」

医師は無表情にそれだけを言うと、診療費請求書と処方箋の入ったセルケースを患者に手渡した。

「これを会計に出して下さい」

亮一は、診察の結果の説明、つまり異常が認められるのかどうか、あるとすれば何が原因しているのか、その原因に対する対処方法などについての一切の説明がないまま薬局の待合室で待っていた。彼はすべてのことが判然とせず、腑に落ちないままで釈然としないものを感じていた。

医師が様子を見ましよう、という言葉を使う場合の背景には、病状について何も判らない場合が多い。後は患者の述べた症状から判断して、こんな薬が効くのではないかという推測のもとに処方箋を書く。

推測は当たる場合もあるが、当たらない場合もある。心なんてものは、所詮人体のどこにあるのかさえも不明瞭なものだから推測で様子を見る意外には手が無いのだろう。ただこの場合、特に注意しなければならぬのは薬の副作用である。

亮一は、そのようなことを考えながら病院を出た。

帰宅後、薬剤を一ヶ月間服用したが、その間一度も律子の幻覚を見ることはなかった。

が、その後二度ほど律子のジョギング姿を森林公園近くの遊歩道で見かけた。彼女は柔らかな微笑を醸しながら走り、

「おはようございます」

と、変わらぬ親しみのある挨拶を投げかけてきた。

そのような不可解とも思える現象が続いていた、その年の瀬も暮れかかり、再び親睦会の忘年会の日がやって来た。広間に並べられた座卓に仄かな湯煙の立つ鍋を囲みながら、一頻り座が盛り上がった一瞬の間隙をみつけて、横に座っていた横田が差し出した銚子を傾けながら憶い出したように言った。

「どつだ、その後も長田律子の姿を見かけることがあるのか？」

「まあなあ……」

「何回ぐらい見かけたんだ」

「二、三度かな……」

「そうか。医者はまだ行っているのかい」

「いいや。もうやめたよ」

「おいおい。千葉、お前どこが悪いのか？」

と、横田の向側の席に座っていた狩野という男が訊いてきた。

「いやあ。こいつね。亡くなった長田律子に逢ったらいいんだよ」

亮一が答えあぐねていると、横田が素早く代って答えていた。すると狩野は好奇心に駆られたような嘲笑を浮かべながら訊ねて来た。それにも、やはり横田が答えていた。

「へえ。どこでだ」

「森林公園近くの遊歩道の路上でだなあ……」

「そりゃ可笑しいなあ……。それって幽霊じゃないの」

狩野がちやかすように皮肉な微笑を浮かべて言った。

「まさか……。そんなもの出るわけがないだろう」

横田がすぐさま真顔で否定するように言った。その時、亮一の向側の席で、先程から彼らの会話に聞耳を立てていた辻井ひさこ女史が、憶い出したように改まった口調でこう言ったのである。

「そう言えば、彼女ね、双子だったんですって、皆さんご存知でしたか」

「いいやあ……。それは知らなかったなあ……」

「本当に？」

「ええ。私も最初は知らなかったんですが、一卵性双生児ってご存知でしょう。亡くなったのは、そのお姉さんの方だったらしいわよ」

「と、言うことは、同じような顔をした妹が、もう一人いるってことが」

「あれは昨年の八月だったかしら。平和堂の食品売り場ではったり会って、声をかけたら、私は妹の方ですっておっしゃって……。あの時は本当にびっくりしましたわ」

「そいつは奇遇だなあ……」

「なるほど……」

その場に居合わせた誰もが納得したように黙然として小さく頷いている。そして横田が気を取り直したように亮一に言った。

「それじゃ、お前が長田律子だと思っている女性ランナーは、その妹の方じゃないのか」
「……」

黙然として皆の話に耳を傾けていた亮一は、周囲の大きな哄笑の渦の中で愕然として聴きながら、横田の憐憫のこもった言葉に微かに頷いていた。そして妄想の懊悩が次第に溶けて行くのが感じられるのであった。

「よかったじゃないか。正直言っただ心配したよ」

「ああ……」

横田は苦笑しながら安堵したように言った。確かにジョギングをしていたのは瓜二つの

妹だったかも知れない。否、そうであったらと思う。しかし、昨年十二月の初旬に逢ったのは、紛れも無く長田律子本人であった。何と言っても彼女とは三十分近くも話し合っていたのだから、見間違うはずがない。

彼女は、恐らくこの世との決別に際し、どうしても千葉亮一という男に逢っておきたかったのではないか。そんな執念にも似た執拗なまでの未練を胸に抱いて息を引き取って逝ったように思えてならない。

そのように考えてみると、亮一は彼女に逢った時の状況を皆に話そうかと思つて口まで出かかったが、辛うじて言葉を飲み込んでしまい黙秘を通した。どうせ話をしたところで、失笑をかうだけで、実際には誰も信じるものはないだろうと思つたからだ。

三十分も立ち話をしていただけだから、一人や二人の目撃した人間がいるに違いない。しかし、この場でそれを立証することは不可能なことだから、結局は水掛け論になり、虚しい思いをするだけで終わってしまうかも知れない。

そう思うと喋る気にもならなかった。自分を含めて集まっている連中は、既成概念の枠の中で、言わば桎梏しごくの人生を生きているのだ。

だから物質文明に蹂躪じゅうりつされて唯物論をふりかざしている彼らに、黄泉よみの国から逢いに来た人間の話など一体誰が信じられようか。結局、長田律子は亮一の心の中だけに生き続けて行くのかも知れない。彼が生きている限り……。

彼は深い嘆息を吐きながら、立ち込める湯気の中に律子の微笑する面影をぼんやりと見詰っていた。

(完)